

# マリアの子ども

グリム Grimm

矢崎源九郎訳

青空文庫



ある大きな森のまえに、ひとりの木こりが、おかみさんといっしよに住んでいました。子どもは、三つになる女の子がたったひとりしかありませんでした。

木こり夫婦ふうふはたいへん貧乏びんぼうで、その日その日のパンもなく、子どもになにを食べさせたらよいか、とほうにくれるほどでした。ある朝、木こりは心配しんぱいごとに胸むねをいためながら、森へしごとでかけました。木こりが森のなかで木を切っていますと、ふいに、背せの高い美しい女の子が目めのまえにあらわれました。みれば、女の子はぴかぴかかがやく星のかんむりを頭にいただいています。女の子は、木こりにむかっていいました。

「あたしは聖母せいぼマリア、幼子おきなごキリストの母です。おまえは貧乏びんぼで、その日のものにもこまっていますね。あたしのところへおまえの子どもをつれていらつしやい。あたしがその子どもをつれていつて、めんどろをみてあげましよう。」

木こりはいわれたとおり、子どもをつれてきて、聖母マリアにわたしました。マリアはその子どもをつれて、天国てんごくにのぼっていきましました。子どもはたいへんしあわせでした。さとうのはいったパンを食べたたり、あまいミルクをのんだりしました。そして、金のきん着物きものをきて、かわいい天使てんしたちといつしよにあそびました。

やがて、この子が十四になったときのことです。ある日、聖母せいぼマリアがこの子をよびよせて、いいました。

「あのね、あたしはこれから長い旅たびにでます。それで、おまえにこの天国の十三の扉とびらのかぎをあずけておきます。このうちの十二の扉はあけて、なかにあるりっぱなものを見てもいいんですよ。でも、十三ばんめの扉は、この小さなかぎで、あくことはあきますけど、でもあけてはいけません。ようく注意ちゅういして、あけないようにするんですよ。さもないと、おまえはふしあわせになりますからね。」

女の子は、きつといいつけをまもります、と約束やくそくしました。

やがて、聖母せいぼマリアが旅にでてしましますと、女の子は天国の住まいの見物けんぶつをはじめました。まい日ひとつずつ扉とびらをあけていくうちに、いつのまにか、十二ばんめの住まいまですっかり見て

しまいました。

どの住まいにも（一）使徒しとがひとりずついて、大きなみ光ひかりにつつまれていました。女の子は、ひかりかがやくあたりのすばらしいようすを見て、大よろこびでした。かわいい天使てんしたちも、いつも女の子のあとについて行って、女の子といっしょに、うれしがっていました。

こうして、あとには、いよいよ、あけてはいけないといわれている扉とびらが、ひとつのこつているだけになりました。女の子は、そこになにかかくされているのか、知りたくてなりません。それで、小さい天使てんしたちにもわかっていいました。

「あたし、みんなはあけないし、それに、なかへはいつたりもし

ないわ。ただ、そつとあけて、ちよつとすきまからのぞいてみた  
いの。」

「まあ、いけないわ。」

と、小さな天使たちはいいました。

「それはよくないことよ。だって、聖母せいぼマリアさまがそんなこと  
をしてはいけないっておっしゃったんですもの。それに、あなた  
はふしあわせなめにおあいになるかもしれないわ。」

そういわれて、女の子はだまっていました。心の中の見  
たいという気持ちだけは、すこしもかわりませんでした。それど  
ろか、もういつときもおちついていっていることができないほど、見  
たくて見たくてたまらなくなっていたのです。

あるとき、小さな天使たちがみんなでかけてしまったあとで、

女の子は、

(いまならあたしひとりだから、のぞいて見たってかまやしない。あたしが見たってことは、だれにもわかりやしないんだもの。)と、考えました。

女の子はその扉とびらのかぎをえらびだしますと、それを手にとつて、錠じょうにさしました。そして、さしこんだかぎをぐつとまわしました。すると、扉とびらがぱつとあきました。とたんに、(2)三位さんみ一体いつたいの神かみさまの、火とみ光ひかりにつつまれているすがたが、女の子の目につりました。

女の子はびっくりして、しばらくのあいだは、ぼんやりつつ立



つたまま、ながめていました。けれども、やがて、そのみ光ひかりに指をちよつとふれてみました。すると、その指がすっかり金色きんいろになつてしまいました。と、きゆうに、女の子は、なんだかどつてもこわくなつて、扉とびらをかたくしめるがはやいか、あわててにげだしました。

ところが、それからというものは、女の子はどんなことをしてみても、なんとなくこわくてたまらないのです。胸むねはしよつちゆうどきどきしていて、ちつともしずまることはありません。それに、指さきについた金色は、どんなにあらつても、こすつても、みても、さつぱりおちないのです。

それからまもなくして、聖母せいぼマリアは旅たびからかえつてきました。

マリアは女の子をよんで、天国てんごくのかぎをかえすようにいいました。女の子がかぎたばをさしだしますと、マリアは女の子の目をじっと見つめて、いいました。

「十三ばんめの扉とびらはあけなかつたでしょうね。」

「はい。」

と、女の子はこたえました。

マリアが女の子の胸むねに手をあててみますと、心臓しんぞうがどきどきうっています。それで、マリアには、女の子がいつつけをやぶつて、扉とびらをあけたことが、わかりました。そこでもういちど、マリアは、

「きつとあけなかつたのね。」

と、いいました。

「はい。」

と、女の子ももういちどこたえました。

そのとき、マリアは、天国てんごくの光にさわったため金色きんいろになつて  
いる女の子の指さきを見て、やっぱりこの子がいいつけをまも  
らなかつたことを、はつきりと知りました。

そこで、さらにもういちど、

「ほんとうにあけなかつたのね。」

と、念ねんをおしました。

「はい。」

と、女の子は三度めもこたえました。

すると、マリアは、

「おまえは、あたしのいいつけをきかなかつたばかりか、うそまでもいいましたね。おまえは、もう天国にいる資格しかくがありません。」

と、いいました。

それから、女の子はぐつすりねむりました。ところが目がさめてみますと、どうでしょう。いつのまにかじぶんは下界げかいにおいて、荒れ野あのまんまんなかにねているではありませんか。

女の子は大声をあげてさげぼうとしましたが、どうしたものか、うんともすんともいうことができませぬ。女の子ははねおきて、かけだそうとしました。ところが、どっちをむいても、いちめん

にイバラがおいしげっていて、ゆくてをさえぎっているではありませんか。これでは、とてもつきぬけることはできません。

女の子がとじこめられてしまったこの荒れ野あには、うろのある一本の古い木がありました。女の子は、ここをすみかにするよりほかしかたがありません。夜になると、そのなかにもぐりこんで、ねむりました。それから、嵐あらしや雨のときには、このなかにかくれていました。といっても、これはみじめなくらしでした。ですから、天国てんごくのたのしかったことや、かわいらしい天使てんしたちとあそんだことを思いだしますと、そのたびに、女の子はさめざめと泣なくのでした。

食べものといえば、木の根ねや草の実みがあるばかりです。女の子

はそれを、歩けるだけ遠くまで歩いていつては、さがしまわりました。秋には地面じめんにおちたクルミや木この葉はをあつめて、うろのなかにはこびこみました。クルミは冬のあいだの食べものなのです。やがて、雪と氷こおりにとざされるようになり、女の子はあわれなけものみたいに、木の葉のあいだにもぐりこんで、ここえなようにしました。そのうちに、きている着物きものがぼろぼろになつて、すこしずつからだからちぎれおちました。

やがてまた、お日さまがあたたかにてりはじめますと、女の子はすぐにそとへでて、その木のまえにすわりました。長い髪かみの毛けは、女の子のからだを、マントのように、すっぽりとくるんでいました。

こうして、一年また一年とたつていきました。女の子は世よのなかのつらさ、なさけなさを、しみじみとあじわいました。

木ぎが、ふたたびみずみずしい若葉わかばをつけはじめたころのことでした。あるとき、この国の王さまが、森で狩かりをして、シカを追おつていきました。ところが、シカは森をかこんでいるやぶのなかににげこんでしまいました。そこで、王さまは馬からおりて、しげみをおしわけおしわけ、つるぎで道をきりひらいてすすんでいきました。

こうして、やつとのことのでそこをつきぬけていきますと、あの木の下に、目もさめるような美しいむすめがすわっているではありませんか。むすめはからだじゅう足のつまさきまで、金きんいろ色の

髪かみの毛けですっかりつつまれています。王さまはじつと立ちどまつて、びっくりしてむすめの顔を見つめていました。やがてむすめに話しかけて、

「おまえはだれだね。どうしてこんな荒あれ野ののなかにいるのだね。」

と、たずねました。

けれども、むすめはなんにもへんじをしませんでした。だって、口をひらくことができないのですもの。王さまはなおもことばをつづけて、

「わしといっしょに城しろへこないかね。」  
と、いいました。



するとむすめは、ほんのちよつとうなずいてみせました。

そこで、王さまはむすめをだきあげて、じぶんの馬にのせ、お城へむかつて馬をすすませていきました。

お城へかえりますと、むすめは王さまから美しい着物をはじめ、いろんなものをたくさんいただきました。むすめは口こそきくこととはできませんでしたが、たいそう美しくて、かわいらしいので、王さまは心のそこからこのむすめがすきになりました。そしてまもなく、むすめと婚礼こんれいの式をあげました。

一年ばかりたったとき、お妃さまは男おしの子を生みました。ある晩ばんのこと、お妃さまがひとりで寢床ねどこにねていますと、聖母せいぼマリアがすがたをあらわして、こういいました。

「おまえがほんとうのことをいって、いけないといわれていた扉とびらをあけたことを白はくじよう状すれば、おまえの口がひらいて、もとのように話すことができるようにしてあげましょう。でも、おまえが罪つみをあらためないで、いつまでもがんこにうそをいいはるのなら、この赤ちゃんをつれていってしまえますよ。」

このとき、お妃きさきさまはへんじをするために、口をきくことができようになるしました。けれども、あいかわらず強ごうじよう情をはつて、

「いいえ、いけないといわれた扉とびらはあけはいたしませんでした。」と、こたえました。

すると、聖母せいぼマリアは、生まれたばかりの赤ちゃんをお妃きさきさま

の腕うでからとつて、子どもといつしよにきえてしまいました。

あくる朝、赤ちゃんのすがたがどこにも見えませんので、だれ  
いうとなく、お妃さまは人食ひとくい鬼おにだ、じぶんの子どもを殺ころしてし  
まったのだ、といううわさをしはじめました。お妃さまもそれを  
のこらずききましたが、といつて、それに反はんたい対たいすることもでき  
ません。もつとも王さまは、お妃さまが心からすきでしたので、  
そんなことばには耳みみをもかそうとはしませんでした。

一年たつて、お妃きさきさまはまた男おとこの子を生なみました。その晩ばん、聖せい  
母いぼマリアがまたもお妃さまのところへあらわれて、いいました。  
「おまえが、いけないといわれていた扉とびらをあけたことを白はくじよう状じよう  
すれば、赤ちゃんもかえしてあげますし、舌したもうごくようにして

あげましょう。けれども、おまえが罪をくいあらためないで、あ  
いかわらずうそをいいはるのなら、この赤ちゃんもつれていつて  
しまいますよ。」

ところが、お妃さまはこんども、

「いいえ、とめられておりました扉は、あけはいたしませんでし  
た。」

と、いいました。

すると、マリアはお妃さまの腕うでから赤ちゃんをとつて、天国  
へつれていつてしまいました。

あくる朝、またまた赤ちゃんのすがたが見えませんでした、みん  
なは、お妃さまきさきさがのんでしまったのだと、大声にいいたてました。

王さまのご相談役の人たちは、お妃さまを裁判さいばんにかけるように、と、もうしたてました。

けれども、王さまはお妃さまがかわいくてなりませんので、そんなことは頭から信用しんようしようとはしませんでした。そして、ご相談役の人たちに、こんご二度とそんなことをもうすと、死刑しけいにいたすぞ、ときびしくいいわたしました。

そのつぎの年、お妃さまは美しい女の子を生まました。と、その晩ばん、またしても聖母せいぼマリアがあらわれて、

「あたしのあとについておいで。」  
と、いいました。

マリアはお妃さまきさきの手をとって、天国てんごくにつれていき、お妃さ

まに上のふたりの子どもを見せてやりました。ふたりは、地球ちぎゆうをおもちやにしてあそんでいましたが、お妃さまを見ると、につきりわらいました。お妃さまがそのすがたを見てよろこんでおりますと、聖母マリアがいました。

「おまえの心は、まだとけないの。おまえが、いけないといわれていた扉とびらをあけたと白はくじょう状しさえすれば、ふたりのぼうやはかえしてあげるんですよ。」

ところがお妃さまは、

「いいえ、いけないといわれておりました扉とびらは、あけはいたしませんでした。」

と、三度めもこたえてしまいました。

そこでマリアは、お妃さまきさまをふたたび地上ちじょうにおろして、三ば  
んめの赤ちゃんもとりあげてしまったのです。

あくる朝になつて、このことが知れわたりますと、だれもかれ  
もが、

「お妃さまは人食ひとくい鬼おにだ。裁判さいばんにかけろ。」  
と、口ぐちにさげびたてました。

こうなつては、さすがの王さまも、もうご相談役そうだんやくの人たちを  
はねつけるわけにはいきません。こうして、裁判がひらかれまし  
た。しかし、お妃さまはへんじをすることもできませんし、いい  
わけをすることもできません。そこで、とうとう、火あぶりの刑けい  
にきまつてしまいました。

そこで、まきがはこびこまれました。いよいよ、お妃さまは柱にしぼりつけられました。やがて、そのまわりじゆうに火がもえだしました。そのとき、お妃さまの胸のなかにすくつていた思いあがりのあつい氷がとけて、お妃さまは心のそこから後悔しました。そして、

(せめて死ぬまえに、あたしが扉をあけましたと白状するこどができたなら、どんなにうれしいかshれない。)  
と、思いました。

すると、きゆうに声がでるようになりました。お妃さまは大声にさけびました。

「ああ、マリアさま、あたしが扉をあけました。」



と、どうでしょう、そのとたん、雨がざあざあふりだして、  
たちまちほのおをけしてしまつたではありませんか。お妃さまの  
頭の上に、ひとすじの光がさしたかと思うと、聖母マリアが地  
上うにおりてきました。マリアは、ふたりの男の子を両わきにつ  
れ、生まれたばかりの赤ちゃんを腕うでにだいています。マリアはお  
妃さまにむかつてやさしく、  
「じぶんの罪つみをくいて懺悔ざんげをするものは、ゆるされるのですよ。」  
と、いいながら、三人の子どもをわたして、お妃さまの舌したをうづこ  
くようにしてくれました。しかもそればかりか、お妃さまに――  
生ようのしあわせをもさずけてくださつたのです。

(1) 使徒しとというのは、イエスイエスキリストが教えおしをひろめるためにえらんだ十二人の弟子でしのことです。

(2) 三位さんみ一体いつたいというのは、キリスト教きりょうで、父である天てんの神かみと、子であるキリストと、聖霊せいれいの三つはもとも一体であるというきょうり教理きょうりです。

# 青空文庫情報

底本：「グリム童話集（一）」偕成社文庫、偕成社

1980（昭和55）年6月1刷

2009（平成21）年6月49刷

入力：sogo

校正：チエコ

2019年8月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

# マリアの子ども

グリム Grimm

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫  
著者 矢崎源九郎訳  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>